



中里喜昭
ふたたび歌え



筑摩書房

ふたたび歌え

一九七三年六月二十五日初版第一刷発行

著 者 中里喜昭

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

振替／東京 四二二三 TEL 二九一七六五一

郵便番号／一〇一一九一

写真／森山大道／装幀／中島かほる

印刷／三松堂印刷 製本／和田製本

ふたたび歌え

外泊願を看護婦詰所にだし、病室にもどつてくると、信吉はすぐに着がえをはじめた。ロッカーに永くしまいいこんでいた学生服は、つよいナフタリンの匂いがし、手足を通すと、体のひきしまる冷たさだった。

「めし、食っていけよ」

同室の男たちは、音をたてて昼めしを食っている。信吉は窓により、朝からの雪をながめていた。二〇センチほど積み、雪はもうやんで陽がさしている。屋根には、青みをおびた雪の断面が連なり、目が高くなるにしたがつて、女たちがつぶやいているような、解け水のしたたる音がしげくなった。盆地の、しめった土から立つ水蒸気が、向いのみかん山のはだれを煙のようにはい上り、頂上にあつまつて雲のかたまりを作っている。

信吉は、庭下駄をつっかけて外にでてみた。ぬくもった雪は、灰いろにうるんでもろかった。

きょうは三本の手紙がきていた。父からと、先輩の吉川からと、オリエからだ。東京からの吉川の手紙は、二、三日中に帰郷すること、そして造船所の電気溶接の臨時工となること、などだった。手紙のついた今は、もう東京を発っている筈だ。

父の手紙は——父の手紙など、信吉はいままでもらった

ことがない。いままで働いていた紙の卸店が倒産し、じぶんも肝臓がわるいので家で寝ている、という。

だが、信吉が外泊願をだしたのは、オリエの手紙をみたからだだった。

へ——あなたをひとりの男として愛することができないのはかなしい。でも、このかなしみは大事にしたい。よろこびは自己を空しくする力をもっています。だから、あなたのよろこびも私のよろこびもおなじです。でも、かなしみはちがう。かなしみは、かならず私にかえってくる、知性をもった感情です。

あなたが外泊する機会に、兄たち——こちらの白秋門下が歌会をひらくといっています。あなた、白秋がきらいだけれど、でも、兄たちの結社にいる以上、あなたの系譜は、白秋のマゴ弟子ということになるの。みんな、気のいい人たちばかりだから、いつかのように、白秋をこきおろしたりしないこと。みんな若くなく、悲しみたくない。みんなあなたを好きだし。だからやさしくしてあげなくちゃ。白秋直系の若き詠い手——それでのほほんとしてなさい。でも、あとでさみしくならないようにね。

あなたのとこにも床頭台というあのかなしい戸棚があるのでしょう。あの寸法をはかっておしえてね。いま、ロウケツ染めをならっています。

ようするに、おれがオリエより七歳も年下だという、かんたんなことをいいたいのだ。だが、信吉にとってかんた

んなことを壁にして、オリエは、じぶんのまわりをつつんでいた。

信吉は、きゅうにじぶんの学生服姿がみじめにおもえてきた。信吉が、いま勤めている造船所の、社内の技能者養成機関である造船技術学校を卒業したのは一昨年だった。卒業ご、現場にある造船製図室に配属され、ろくに仕事もおぼえないうち結核にかかったのだ。だから、一年とすこしになるここでの療養生活は、学生であった時代の延長のようなものだった。

日陰の雪は、まだとけないで、新鮮な白さを放っている。信吉は学生帽のつばを横にむけ、雪の中に顔を突っこんで食ってみた。それは意外に硬かった。みんなが歌会をひらいてくれるからは、一首作っておく必要があった。そして、いまじぶんが、心ひもじい気持でいることが、いい歌のできそうな予感とつながっていた。

室にもどると、外泊願の許可はまだおりてきていなかった。床頭台の上で、アルミ碗の汁はつめたくなっている。

信吉は、小鍋を借り、汁をうつして流しにはこんだ。七輪の火が熾っていて、だれもない。汁はすぐに音をたててぬくもった。その泡だつ中に、そうめんを半束、扇形にひろげて入れた。そうめんはかんたんだし、どんな汁にも合った。

「あら、ごちそう」

ユキちゃん、とよばれている女患が、目刺をさげて入っ

てきた。彼女は、そのまま、信吉の横に体をくっつけてしゃがみ、小鍋のまわりに目刺をならべはじめた。

「外泊？　かのじょ？」

信吉は、なるべくものをいわないように、喉の奥の声でこたえた。ユキちゃんは、隣接する市の、ミス・コンテストで入選し、それがもとで県庁の秘書課に勤めていた。結核にかかり、ここへ来てからは、やけになってすこし荒れている。土曜の夜、消灯時をすぎるころ、かならず何種類かの男たちがやってき、彼女はそうちのひとりとしてかけ十二時ごろか、日曜の朝はやく帰ってくる。同室の女たちからきかれると、あけっぴろげになにもかも話す。天真らんまん、いつも陽気だった。

通俗な感じだが、ユキちゃんは美しかった。かすかにそばかすが浮いて、コンテストむぎの、あのあざとい美しさをやわらげている。したしみやすく、きどらなかつた。

「でも、あんたいくつ」

彼女は体をくっつけたままだ。

「――十九歳。まっ、かあい」

そして、あたたかい、ばらいろの舌で、すばやく信吉の耳をなめた。

「おれ、かあいかない」

信吉は立ちあがった。逢うまえに耳を洗っていこう。そうめんの小鍋をかかえていきながら、じぶんの恋にたのむ信吉は、殊勝にそうおもいきめた。

めしがすんでも、外泊許可は、まだこなかった。看護婦たちも食事にいき、絶対安静時間中の検温のときにしかこないのだろう。信吉は床頭台のたてよこの長さきっちり切った紙ひもを大切に胸のポケットに入れた。それから、ひきだしをあげ、小びんをとりだし、うわ澄みのクンメルフェルト氏液を、ちり紙にしませ、顔をかるく拭いた。こうしておけば、むこうへつくまでに、にきびがすこし小さくなる筈だった。

許可は、まだこない。だが、もうでかけるべきだ。信吉は帽子をあれこれ動かしながら、すこし不安だった。いいかわり方を、すっかりわすれていたのだ。だが、もうでかけよう。

許可がないので、門へはまわれない。信吉は松林の方へくだっていった。林をぬけ、国道へでるのだ。有刺鉄線を踏みあげ、反動をつけて、信吉は、わかい松たちのなかにおどりこんだ。

風がではじめ、病棟の日陰の方の軒や、松の木から、雪が粉になって飛んだ。向いの、みかん山の頂上にわだかまっていた水蒸気は、みるまに吹き払われて、吹き払われたあと、痛い程鋭く晴れた。

辻原商店と書いた広ガラスのドアをおすと、辻原は仕事にひと段落つけて経済新聞をよんでいた。

「疲れたろ、上ってめしにしようか」

「食ってききました」

「いや、めしにしよう」

いつも信吉が飢えているものときめてかかって、氣をくばるのだった。ガラス、アスベスト、タイルなど手びろくあつかっている。

おい、と奥に声を投げておいて、ふたりは二階へ上った。三人のこどもたちがあらそってでてきた。

「ほら、ほら——」

辻原の妻は、信吉にとりついたこどもたちをしかった。

いつも根氣よく相手になってやる信吉を、こどもたちはよくおぼえていた。

「太田のお兄ちゃんのご病気です、胸が、あ痛、あ痛です」

しかし、こどもたちはひるまなかつた。

「めしは、いいんです、ぼく」

「そう。では、かるくやってね」

そして、かまわずはこんできた。

「——ソ連、日米安保改定に警告」

辻原は、下からつかんできた新聞をよんだ。

「安保って、なんです」

「さあ、おれもよくしらんが。アメリカとこつちと、盃をかわす、ってなことだろよ」

辻原は新聞から眼をはなさずにいった。

「いまに日本も、街のまんなかにドルの交換所ができるぞ、フィリピンみたいに」

「オリエさん、きょう出勤ですか」

いや、といって辻原はしばらく信吉をみつめた。

「——日曜だ、きょうは。バドミントンの練習にでかけてる」

それは、造船所の技術学校の講堂にちがいない。勤労課につとめているオリエは、所内バドミントン部の部長といっしょに、九州地区の企業対抗試合のため、ずっと練習のスケジュールにしたがっているという。

「ちょっとぼく、おやじをみてきます」

信吉は腰をうかせた。

『造船労組、エリコン反対闘争のホコを収む』か。もめたもんだ」

それからきゆうに新聞からふりむいていった。

「なに、せっかくじゃないか」

辻原は、パセリと赤蕪をそえた皿のうえに、まだぶつぶついている鱈の照り焼をさしながらいった。

「——おやじ、肝臓わるくして、それで」

信吉はもう階段をおりながらいった。

「今夜、歌会やるからくるんだよ、きみの歓迎のためなんだから」

外は、冬の陽がにじむようにさしていた。オリエたちのところへいくには、対岸までおよそ七百メートルの港の海を、フェリー・ボートでこえねばならない。いそげば、その発船にまにあう時間だった。小走りですこし走ったあと、

信吉は動悸がして立ちどまった。銀行の前庭の、コンクリートの杣と杣のあいだにかけわたした、ふとい鎖に腰をかけて、信吉はしばらくじっとしていた。足が両方とも、こまかにふるえているのがわかる。永い病氣だった。

ちよっと家にかえって、父のようすもみてこなければならぬまい。ふつう肝臓の病氣は短期ではすまない。それに、働いていた紙の卸店は、いぜんから赤字で、倒産までのあいだに、賃金の欠配もあった筈だ。退職金なども、もちろんなくて、それで父も寝ているのだから、母はまた建設会社の日やとい土工にでている。

立ちあがっても足のふるえがのこっていた。いったん、家へかえることにした。窓を広びろととった銀行の建物にはるかな港の水照りがうつっていた。信吉は、そのはげしいかがやきを眼に入れて立っていた。オリエに逢いたかった。

きゆうにひるがえって、信吉は港の方へ走りだした。しばらくすると、また心臓がおどりはじめた。だが信吉は、棧橋までの一キロほどを、根かぎり走っていくことにした。にじむような、よわい冬の陽が、港の水面では白熱した光を放っていた。

講堂に入ると、コートにいたオリエがまっすぐに走ってきた。それが信吉にはうれしかった。オリエは赤いセーターと、白いトレパンをはいていた。

「おかえり」

いつも信吉の目がそれるまでみつめてくれるのだった。

「げんきそうよ、ね」

それから、学生服の、わきのポケットの耳をそつとつまんだ。

「あと二セット、まってる」

コートに立つと、オリエは頬のいろがたちまち上気した。眼を大きくひらき、ゴム靴をかるくきしらせながら、シャトルコックの落下点へ、赤と白の、しなやかにはずむ線となつて躍動した。一セットすんでもどつてくるとき、オリエの唇は、まっ赤になつていた。

「あと、一セット、ね」

信吉は、まぶしかつた。けさとどいた手紙がおもいだされた。どうしてこれが、おれの恋人なものか。もつと健康な、もつと明るい——そして、もつとおれには無縁な、なにかなのだ。

「デコちゃん——」

と、男の声がよんだ。

「ちょっと水のみにいかないか」

それは、オリエの相手をしていた男だった。ふたりは外へでていき、十分ほどもどつてこなかった。

もどつてくると、男は、そこにまだぼんやり立っている信吉のために椅子をもつてきてくれた。

「寺山といひます。辻原君とおなじ勤労課の」

ことばや、物腰をみると、寺山は学卒らしい。その、節

度のあるやさしさが、信吉をかたくさせた。

「——辻原君、こんどいいとこまでいきそうで、はりきってますよ」

新聞のスポーツ欄をしめしながら、寺山はコートにいるオリエに、やわらかい視線をむけた。たしかにオリエは、その全国紙の予想で、女子の個人優勝をねらう幾人かのうちに入っていた。

「去年、九州地区二位までいきましたが、こんどは場かずも積んでるし」

それからふといった。

「——Mって男、識りませんか？ 一昨年度優勝の、やっぱり胸の病気で選手をやめました」

「識っています」

「あれが辻原優勝に折紙つけてるんです」

信吉はだまっていた。へやっぱり胸の病氣？ 水をのみながらオリエがどのようにじぶんのことを話したのか、わかるようだった。

帰りは、オリエをはさんで三人で歩いた。オリエは、シャツを丸め、ふろしきにくるみ、それをセーターの下のおなかのところへ入れた。

「ああ、だめだ、だめだ」

と寺山はいった。

「そんな格好しちゃ、まるで」

といつてすばやく信吉をみると、だまっていた。

「おれ、ちょっと鉄棒やってくる」

信吉は、だしぬけにふたりから離れた。鉄棒まで走って、いってとびついた。手を離すと、砂の上におりたのに、足首がじんとする。すっかりよわっているのだった。

「どうしたの」

オリエは大きな眼でみつめた。信吉はまた鉄棒にとびついたら、無気力に揺れていた。

ふたりがもどつてくると、寺山はもとのところに立っていて、たしなみのいい、毒のない笑いをわらった。

それから、ほとんどだまって三人は歩いていった。

「——エリコンが、おわりましたね」

寺山は、別れぎわ、つぶやくようにいってバス停留所に立ちどまった。

海をわたり、信吉もオリエと別れねばならなかった。オリエのもうひとりとの兄——辻原の弟の家によって、マンドリンをとってくるのだ。

「あたし、なんでもやってるでしょう」

オリエは、ちょうどやってきた路面電車にむかって、かけていった。かるくて、はやかった。箱にとびのると、後部の車掌のよこに立ち、胸のところで小さくてのひらをひらひらさせた。信吉が走ってこないのをみると、車掌はのけぞって発車のチンのひもをひいた。信吉は、コンクリートの安全帯のうえに立ち、もう暗くなりはじめた街の空へ、ボールから青い火花をとばして走っていく木造電車を見お

くっていた。

辻原の二階での歌会には、もう七、八名があつまっていた。信吉は手帖に書きつけた詠草をちぎって辻原にだし、みんなのなかにあぐらをかいた。辻原は、みんなの詠草を筆で西洋紙にうつし、番号をつけて鴨居に貼りまわした。かれらの短歌結社は、北原白秋の系統をくむ全国的な組織をもち、辻原がここの責任者だった。信吉とおなじ造船所の保安課長である古賀、県の衛生研究所の技師である伊藤、それに市役所の職員、辻原の取引き先の店主などが主な顔ぶれで、水準もかなり高い歌会だった。県立保健所の保健婦の道田と信吉とが一番若い。そして、かれらは若いことと、去年の結社の年度賞で、そろって最終審査に残ったこととで、みんなにかわいがられていた。ほかに新顔が二人きている。大島の羽織の、小気味よく肥った中年の男と、辻原のこの若い女子店員だ。

ニューカッスル病にたはれし若どりを逆さに下げて少年走る

伊藤のは歌になっていない、と信吉はおもった。ニューカッスル病などという耳あたらしいことばをもってくるところはいかにも衛生研究所の技師らしかったが。

十二名の互選の結果は、この伊藤と信吉のが八票ずつとつて一位だった。

「近代抒情は、うけるもんだ」

辻原は皮肉った。近代抒情は伊藤の一枚看板だった。

「ニューカッスルはだめだ」

と信吉はいった。

「——いかに生きるか、という文学の命題に、なにもこたえてない」

「いかに生きようと、しったこっちゃないよ、『ぼく』」

そして伊藤は信吉の歌をよんだ。

泪ぐましくなりてみていつ丹念におのれひとり洗へる男

「いかに生きてるね、『ぼく』？」

信吉はつまり、むきになっていった。

「でもすくなくとも人間をみるつもりだけだ」

「まあさ、ただみてたって、生きなきゃ……。だけどおれはそんなことどうでもいいんだ。いかに生きるウ？くそくらえてなもんだ。道義も倫理もヘチマの皮も——おれの抒情は反俗精神につながってるよ、口はばったいけど」

「とにかくニューカッスルはだめだ」

信吉は強情にいった。

「どんなキンキラキンに粉飾しても、人間がいなくちゃだ

めだ」

「『ぼく』はすこし『第二芸術論』をよみすぎてるよ」

「——反俗の質が現代的にならなくちゃ、もつとあたらしくならなくちゃだめだ。サッカリン漬けのたくあんだ」

「いや、ぼくはわが社のがわをかうね」

古賀は、要領よく割って入った。

「『ぼく』のいうことも、歌も買うなあ。だって、病者の孤独みたいなのをいちおう見すえてるじゃないか」

「でも、ぼくは『病者』といつてません。『男』です、『おのれひとりの男』です」

「だけど『ぼく』。宮柊二が『抵抗と充足』のなかでこういつてるだろ。へわれわれは短歌詩型を内部衝迫の象徴としてえらぶのではない。ひとつの、民族の普遍性としてえらぶのだ」

辻原がおちついた調子でいい、信吉はだまった。

「『ぼく』は神経質なんだ——」

道田は信吉のひじにさわりながらいった。

「短歌と文学と混同してるんだ。でしょ？」

信吉は、道田の、描いた眉や、こゆい口紅をみた。それからきゆうに疲れてしまった。歌会がおわるまで、信吉はただオリエのことをおもっていた。

会が果てると、みんなで街へでた。喫茶店でソフトクリームをなめている間に一時間たち、女たちはみんな帰った。

「歌人なら古賀鳴彦しかしない、という女が『リスボ

ン」にきてるよ。いくかい」

伊藤は古賀をたきつけた。そして、ベレーを目深にかむり、伊藤はかまわず先頭をあるいた。

「ぼく、いかない」

信吉は立ちどまった。みんなをすっばかして、もう帰ってくるだろうオリエを待つのだ。

「おごるさ『ぼく』」

と辻原はいった。

「いこう、『ぼく』。顔が利くから」

リスボンというクラブは、細造りの鉄柵のアラベスクでかこんだ庭だけを、大きな料理店やクラブ、バーなどのならぶ通りにならべている。鉄柵にはまって、一枚の小さな扉、その上に凝ったランプがひとつ。冬でも花ものを植えたこんだ庭をとおって、やっとも一つの扉——真鍮の金具を光らせ、いつもとぎしてある扉のまえにたつ。会員制になっているのだ。看板も、この入りこんだ扉に小さくかけてある。

赤暗い照明のなかで、兵隊ではないアメリカ人が踊っている。おもったよりせまい。ソファにつくと、女たちが静かにやってきて、信吉ときょうの歌会の新顔の男の名だけきいた。

「帯田、っていう模範中年さ」

ほかはみな会員だった。

キャビア——と伊藤はうたうように注文した。

「——ちょうざめのはららご」

「あいにくとそんな舶来物はきらしておりまして、先生。ソ連圏の輸入には保有ドルをだしぶるってお話よ」

ビールと、野菜をそえたグリルをはこんできた。伊藤から指名された女は、古賀のとなりすわった。

「きみ、なんていう」

「みずえ。よろしくね」

信吉は、ふとオリエを連想した。すると、伊藤がいった。「おれの愛人^アと似てる名だよ、辻原オリエってんだ」

信吉は辻原の顔をみた。こんなところできくオリエの名は、へんに肉体を感じさせた。

「おひとことずつ、教えてくださいね」

みずえという女は、紙ナプキンに口紅をはしらせ、それをみんなにまわした。詠草らしい。客をよく研究している店だった。

「この『栗の花はつか明るむ……』ってところ、なかなかサンボリックじゃないか」

いい歌ではなさそうで、古賀が適当にあわせている。「だけど栗の花つてのはザーメンの匂いとおんなじで、とても『はつか明るむ』なんてもんじゃないぜ」

信吉は、その口紅の詠草をよむべきではないとおもった。まだオリエひとりをおもい澄ましていた。そして、帽子をひざの上において、静かにしていた。

「おい、甘チャン、キャンデー・ボーイ——」

と伊藤は酔いにまぎれて信吉にいった。

「——いつとくが、おれは抒情のさいごの詠い手だよ」

「太田さんも、一つくらいいいかが」

女たちはたくみに割って入り、学生服の信吉にだけはしなだれかからず、だまって飲み干すかたわらから、たえずビールをつぎたした。

「あたしの衛生状態も研究してほしいわ、先生」

女たちは、伊藤をしきりに二階へさそう。黒のふちどりの赤いじゅうたんが、階段の折り目、折り目を真鍮の丸棒でおさえられながら二階へかけあがっている。そのなまめかしいじゅうたんの果てに、暗い扉が金具だけを光らせているのを見ると、信吉はなぜかどきどきした。

「リスボン」をでるときから、信吉は酔っていた。みんなとわざとはぐれて、辻原の家へいこうとおもった。いくらなんでも、もう帰ってしよう……。

「『はく』っ」

と、つよい声でよばれた。道田が目のまえに立っていた。「あなたがいるから——きっとこまってるとおもったからきてあげたのよ」

入れちがいに「リスボン」をのぞいてきたのだ、という。

「伊藤はキザだ。うそつきだ」

「けんかでもしたの」

「オリエさんはおれの愛人だっていってたよ」

ふたりは、しばらくだまってあるいた。信吉ははじめて

酔ったじぶんが珍しかった。

通りには楽焼の店が一軒あり、信吉が十七歳のとき、発病とともにはじめた短歌をみてくれた女流のひとりが経営していた。途中でいまの結社へ走ったため、いまでもじぶんをうらんでいるといううわさをきいている。そこへよつてみる気になった。

店はまだひらいていて、彼女は雇っている二、三人の画工たちといっしょに皿に絵をつけていた。

「いらっしやい——」

ひやかすようにふたりをみてわらった。

「——大きくなったわね」

信吉は、肌を粟だつようなてれくささを感じた。彼女には、まだ少年のイメージがだぶっていたのだ。

「お皿、小を一枚」

オレンジの絵筆をつまみとりながら信吉はいった。皿のまわりをてのひらでかこつて、信吉は、きょうの昼、ユキちゃんを汗をあたたためながら作った一首をかきこんだ。女あるじは、ふたりの皿を電気窯に仕込みながら信吉の声をだしてよんだ。

てのひらの骨透くるまで七輪に火を熾しつつ逢ひたりけり

それから、道田と信吉をみてたのしそうにわらった。か

んちがいしているのだった。

焼きあがって、まだ熱い皿をかかえ店をでた。

「——オリエさん、やっぱり伊藤の、あれなのかな」

「まだいってる」

「——」

「オリエさん、このごろとてもきれいになったね。でも伊藤さんのおせじをまともにとるような人じゃないでしょ」
またしばらくだまってあるいた。

「きみ、ひどいのよ伊藤さん、って。あたしにこれくらいラヴ・レターくれた」

てのひらとてのひらのあいだは十センチほどあった。

「家に毎晩泊りにきて——。母は嫌いだっただけど、いいだせなくて。あのレター、いまでももってる」

「『話の種に窮したとき、人の秘密をしゃべろうとする誘惑に勝てる人はごくまれである』って、ショーペンハウエルだか、いってたよ」

「あら、なんでもよんでるのね」

「ああ、病人だから」
と自信ありげにいった。

「でも、なんでそんなこと、ばくにいうんだ」

「あら、あたし、どうってことないんだ。ただ、そんな人だ、って、伊藤さんは」

信吉は、うたがわしそうに道田をみた。

「ボークが泊らせたわけだ」

「あら、勝手にのりこんでくるのよ」

「勝手に泊らせ、寝せたわけだ」

「そんないい方って、ないわよ、『ほく』」

信吉は、わけもなく腹がたってきた。

「——ボーク、って、あんたのどこの肉だい」

「すごいこというのね」

道田は呑むような声でいった。怒りがひそんでいた。豚肉は道田のニックネームだった。だが、気を変えていった。

「オリエさん、ほんとにきれいになった」

そして、信吉をみつめた。もはやだまりきってふたりはあるいた。通りが切れ、最終の路面電車がでいった花崗岩の敷石のうえに、ラーメン屋の屋台が、赤い大きなちょうちんをともすところだった。

「——でも、眼がすこし陰険だな」

もう、十分ほど黙ってあるいたあと、道田がぼつりといったので信吉はおどろいた。さよならもいわず、後にもみずにあたりは別れた。

オリエは帰っていて、もう眠ったあとだった。枕元によみさしたリルケをおいている。信吉は本をぬすみ、辻原のこともたちのあいだのふとんにもぐりこんだ。辻原の家ではいつもそうやって泊るのだ。

豹の眼は鉄棒の列のために疲れて
もう何もとらえることができない

鉄棒の向うに 世界はもう
消えてしまったかのよう。

室をめぐっての力のない舞踏。

ごくまれに豹の眼がひらかれること
がある

そして物象は
網膜を通り

四肢を流れ
心臓の中に消えてしまう

信吉は、その数行に、するどく爪のあとをつけた。しかし、おれはまだ、一度も豹であったことがない……。ス
イッチのひもをひき、眼をつむると、おもいがけぬなつか
しさでオリエのねがおがうかんだ。若くなく、疲れて。口
を小さくあけて。

目がさめたのは、朝の八時に鳴る造船所のサイレンをき
いてからだ。こどもたちのむこうに、辻原も深ぶかと眠り
こんでいる。

「おはよう」

ふすまを細目にあげ、オリエの顔がのぞいた。出勤だっ

た。

「行ってくる、ね」

ブラウスの桃いろがあざやかにのこった。信吉はとびお
きた。階段をくだると、辻原の妻が台所からでてきた。

「ごはんよ、太田さん」

「いいです」

「だめ」

と信吉の腕をつかんだ。

「あたしに二度も恥かかせるの」

そして、きのうの鰯の照り焼をだしてきた。信吉は流し
ではげしく顔を洗った。頭がすこしすっきりした。

「——あき坊、みんな起こすんですよ。パパはいいか
ら」

二階からは、目のさめたこどもたちの、泣いたりさわい
だりする音がはじまった。あの軍団につかまるまえに——
と信吉はおもった。めしを二杯、味噌汁も二杯すすった。

「もうすんだの」

信吉はかけだしながら靴に足を入れた。

「——ぼく、学校で、会社の飯を二分十二秒で食ったこと
あるんです」

ずっと走った。だが、県庁までのぼる石畳のところでお
きがきてしまった。坂はのぼりきると、ゆるやかなくだり
となり、そこから港がみえる。埋立工事をやっていて、埃
っぽい大地が海に突きだしている。桃いろのブラウスが、

その土いろのなかにうごいていた。こちらが走りつくよりはるかに早く、オリエはフェリー・ボートにのりこむだろう。信吉は県庁のまえにたち、陽のいろをあつめてかなしいオリエのブラウスをみていた。

本屋をすこしまわったあと、はじめて信吉はじぶんの家にむかった。

家では、父がひとり寝ていた。母は日やといにで、弟も仕事をさがしている。弟は入ったばかりの高校に、すでに退学届をだしていた。

父の顔いろは黄いろく、しきりに咳をする。金がないから病院には一度しかかかっていないという。父が病院にいかないのは、金がないこともあるが、もともと、郵便局とか市役所とか病院などにくのをきらっているからだ。その建物に入ると、妙に緊張してものがいえないのだった。

「歯ぐきから血がでて、息が臭うて——」

たしかに、体そのものが腐敗しているようなはげしい異臭だった。

「——爪が、ほれ」

はさみを親指の爪にあてがうと、まるで貝がらのようにもろく割れる。弾力がないのだ。信吉はぼんやりした。これほどとおもわなかった。そして、罪のように、きのうからのことをおもいうかべた。

信吉は、疲れていた。父のよこにふとんをならべ横になつた。じぶんのふとんだったが、弟のえり垢がついていて

くさかった。これから一時間、絶対安静をまもう、と信吉はおもった。病人だけで、立っているもののない家のなかを、ラジオのひるの時報がひびきながら流れた。

二時間くらい眠ってから、信吉は氣力をこめて起きあがつた。することがいろいろあつた。まず、父を保健所につれていくこと。結核にかかっている信吉は、咳をする人間に過敏になっていた。レントゲン撮影をただでできるよう、うまく持ちこむのだ。

信吉は道田に電話をかけ、もどつてくると父を説得した。ところがこれに手間どつて結局一時間ばかりかかつて、やつと外につれだした。

白い上っぱりを着ていた道田は、昨夜の続きのようにあまり口をきかなかった。だが、父のことはてきばきとやってくれた。レントゲンのほか、数種のテストもやった。上履きのぞうり代をふたりで四円払ったほか、いっさい無料だった。廊下を帰りかけると、道田がやってきて、信吉ひとりをよんだ。

「医師せんせいがよんでるよ『ほく』」

それからすばやく耳うちした。

「——お父さん、癌がんよ」

医師の横のシャークステンに明りが入り、父の肺がうつっていた。フィルムはまだ、しずくをたらしている。

「大学病院の方においでなさい、わたしの方で紹介状をあげるから。肺はなんともないけど、どうも肝臓癌かんぞうがんのよう